

イスラム文明の研究

佐藤 次 高

本書の構成は次の通りである。

序言

第一部 中世イスラム史

- (1) イスラム史の解釈
- (2) 初期イスラムにおける政府の展開
- (3) ウマイヤ朝カリフ治下のアラブとビザンチンとの関係
- (4) シェウビーヤ運動の社会的意義
- (5) サラディンの軍隊
- (6) サラディンの業績
- (7) ターリーフ (歴史)

第二部 イスラムの制度、哲学及び宗教

- (8) カリフ制に関するスンニ―理論についての若干の考察
- (9) カリフ制に関するマールワディーの理論
- (10) イブン・ハルドゥンの政治理論のイスラム的背景
- (11) イスラムの宗教思想の構造

批評と紹介 佐藤

(12) アラブ文学の考察 (アラビア語)

第三部 現代精神の流れ

- (13) 現代アラブ文学研究
 - (14) 西欧文化に対する中東の反発
 - (15) 現代中東史上の諸問題
- 著書及び論文目録

以上のごとく、本書は四十年近くにわたる著者の数多くの論文の中から十五篇を抜粋した論文集であり、ギブの研究成果をこれによつていわば集約的に示そうとしたものである。

(1) の「イスラム史の解釈」については林武氏による翻訳及び解説(「みすず」七一号・七三三号、一九六五年)が、また(3)の「ウマイヤ朝カリフ治下のアラブとビザンチンとの関係」については渡辺金一氏による書評(「月報」「日本オリエント学会」第三巻第三号、一九六〇年)がすでに発表されている。

著者のギブについては、改めて紹介するまでもなく、現在、世界のイスラム研究の指導的立場に立つ人であり、その経歴等は林氏の解説に詳しいので、それを参照していただきたい。ところで、収録された十五篇の論文をすべて紹介することはとうてい不可能なので、ここでは主な論文を抜粋して紹介し、それによつて著者の研究の性格を明らかにする方法を取りたい。なお本書においては、一般読者のためにアラビ

ア語の転写は省略した方法が用いられている(例えば qada' → qada)。

まず第一の論文「イスラム史の解釈」において、著者は対象を西アジアのイスラムに限定して、(a) イスラム社会の内部構造が変化した西暦十四世紀までのイスラム文化の発展をあとづけ、(b) 諸々の制度が統一へと形造られてゆき、特にイスラム的な刻印を押されてゆく過程を検証しようとする。詳しい内容の紹介は省略しなければならないが、著者はイスラム史における西暦十世紀末から、十三世紀までを「イスラム・ルネッサンス」とし、イスラム社会が文化的・精神的に大いに発展して、比較的個人の自由が認められた時代であると考える。スンニー(正統派)に属する人々が「イスラム・ルネッサンス」に参加出来たのは、十世紀ごろまでにスンニー派の組織はほぼ固定したにも拘らず、それがなお個人の自由を容認していたからであつた。そうした意味において、十一世紀の、セルジュクトルコノ発展に平行して行われた厳格なスンニー派の復活はイスラム文化の転回点となつたのである。結局、著者は中世イスラム史全体を支配しているのは次の二点であると考える。すなわち、(a) 内外の挑戦を受けて立ち、スンニー派宗教制度のもつ普遍主義を堅持しようとする努力と、(b) 全イスラム世界を通じて最も広汎でかつ可能な宗教・社会・文化の統一の基準を実施すると

いうこと、である。

第二の点(b)について、より具体的に言えば、それはイスラム国家における政治機構とイスラム的規範とを調和させようということであり、イスラム中世史は両者の調和の困難さによつて特徴づけられる。こうした視角から書かれたのが第二の論文「初期イスラムにおける政府の展開」であり、ここでは、まずウマイヤ朝後期のカリフ、ヒシャーム(在位七二四〜四三年)が当面した問題の性格が分析される。すなわち、マホメットによつてもたらされた新しいイデオロギーの外発的エネルギーが攻撃的發展の中に吸収されている間は、それに見合う内部組織は存在せず、わずかに「政府」の組織の中にだけ新思想は体现されていた。従つて、ウマイヤ朝のカリフたちがアラブ部族の安定化及びカリフ権力の基礎の固定化に失敗した時、すでに、イスラム社会体制はその内部から、イスラムが排した「ペルシャ帝国の君主的伝統」による支配を要求していたのである。こうした問題を自覚したヒシャームはササン朝ペルシャの行政機構の発達に明らかな興味を示した。しかしササン朝の中央集権化された君主制・強力な貴族制・組織化された宗教的ヒエラルヒー等は結局イスラム思想に合致しなかつたのである。では、ウマイヤ朝の君主より一層独裁的であつたアッバース朝のカリフたちについて考える時、彼らの権力はイスラム思想の創造的原理とならぶ

統治組織の原理をもたらしたであろうか。結果は否である。アッバース朝のカリフはスンニー派を採用し、またササン朝の影響を非常に多く受けたにも拘らず、両者はついに真の意味で結びつくことは出来なかつた。

以上はこの論文においてギブの主張するところであるが、一般にウマイヤ朝からアッバース朝への変化はアラブ帝国からイスラム帝国への変化として表現される。つまり、イスラム教は次第に、より普遍的な性格を帯びてくるのである。とすれば、アッバース朝治下においては、イスラム思想とペルシヤの性格をもつ行政組織の不一致というより、むしろイスラム思想は異質な行政組織を包含するようになると思われるべきではないか、という疑問が生じる。

第四の論文「シュウビーヤ運動の社会的意義」も同様な問題意識の下に書かれたものであり、西暦九・十世紀のアラブと非アラブとの文学闘争を、ゴールドツィーヘルの研究(『Muhammedanische Studien』 Halle, Bd. I. 1889, (IV) Die Shu'ūbiya, (V) Die Shu'ūbiya und ihre Bekundung in der Wissenschaft)とは異なつた角度から考察したものである。すなわち著者はこのシュウビーヤ闘争を文学二派の対立とか、政治的ナシヨナリズム／＼アラブ人対ペルシヤ人への対立としてだけでなく、全体としてイスラム文化の運命を決定する闘争として扱っている。従つて、

当面する問題は、アラブ的・イスラム的要素が吸収される古代ペルシヤ文化の再現か、あるいは逆にペルシヤ文化がアラブの伝統及びイスラムの価値に從属するかどうかということになる。それ故、著者は、結局アラブ人文主義が勝利を得ることによつてイスラム文化は衰亡の危機を脱したと考へるのである。

次に第一の論文で中世イスラム史を支配すると思へられたもう一方の点、スンニー派の宗教制度がもつ「普遍主義の維持」ということについて著者の説くところをみてみたい。具体的には第二部「イスラムの制度・哲学及び宗教」を紹介することになる。第八の論文「カリフ制に関するスンニー理論についての若干の考察」は、まず十世紀から十一世紀にかけての、シャーフィー派の法学者マールワルディーの「政府の制度」を検討し、各時代の政治権力の合法制を示すことは裁判官の義務であつたことから考へて、彼がスンニー派の、歴史を越えた最終的法典を編さんしたとする一般説は不当であるとしてゐる。つまり、マールワルディー以後のシャーフィー派のイマーム論は次第に変化した、すなわち、イマームをシャーリア(法)から切り離して、ついにシャーリアによる支配を否定するようになったのである。その結果、これに代つてシャーリア優越の原理を認め、カリフの機能を守る新しい政治理論を要求する声が起つてきた。そうした要求に答へて登

場したのが、世俗権力とカリフ権力とを区別したマールイク派のイブン・ハルドゥーンであり、彼に続くシャーフイー派の法学者ジャラルッディーン・ダッワーニーであつた。結局、著者はスンニー派理論が多様性をもつなかで、それらを買く唯一の普遍的原理として、「カリフはシャリーアの秩序を保持し、かつこれを実行しなければならない」ということを抽出している。

著者の歴史及び文学に関する論文の基礎をなす第十一の論文「イスラムの宗教思想の構造」では、イスラム教徒の宗教的態度の分析が行われる。まず、イスラムはアラビアにおけるアニミズム起源の一般信仰の土台の上に築かれた宗教であることが述べられ、次いで、愛すべき予言者マホメットに対する個人的感情の激しさが、ムスリム大衆の宗教における最も創造的な要素であつたとされる。そうした宗教感情の面において、神秘主義者の作つた聖歌はよく人々の心をとらえた。著者は厳格なスンニー派の教義に対するこのスーフイズム運動を高く評価し、スーフイズムの審美的要素は十三世紀のイスラムの外的発展において大きな役割を演じた、すなわち、スーフイズムは大衆の伝統的本能を復活させたと考えるのである。なお、スーフイズムについての著者の見解は *Mohammedanism* (London, 1949) 第八章・第九章に詳しく。

以上は、著者のイスラム史に対する深い認識と、互にあい矛盾する要素を考慮しながら歴史を常に緊張関係において、しかも動的に把握しようとする方法とによつて特徴づけられる論文であつて、個々の史料を提示したいわゆる実証的な研究ではない。第五の「サラディン」の軍隊は、著者自ら「序言」で述べているように、彼の一般的な記述の背後には、常にこうした詳細な研究があることを示そうとした論文である。ここでは正規軍であるエジプト軍の編成及び給与の支払形態、非正規軍であるシリア・メソポタミアの軍隊、また補助軍(馬、歩兵)について、さらに軍の装備と兵糧について細かな史料を掲げて論が展開されている。しかしながら、軍人に対する俸給の支払い単位「ディーナール・ジュンディ」については、著者も注においてその理解の仕方が不十分なことを認めているように、いささか分析不足である(ディーナール・ジュンディについては時代はやや降るが、A. N. Piliak "Some Notes on the Feudal System of the Mamliks", JRAS, 1937 が参考にならぬ)。

ところで、イクター封建制に基づくこの俸給支払い方法について、ギブの分析が不十分であるのは偶然ではない。これまでに紹介した数篇の論文から明らかなように、著者は社会・経済体制の展開という側面からではなく、イスラム思想の展開に最も重要性を置いた文化的な立場に立つてイスラム史

を解釈している。イスラム教の地域的發展ということから、西暦十三世紀を中世イスラム史における最も華々しい時代と考え、また、ウマイヤ朝・アッバース朝の政府の問題を主にイスラム思想との関連において把えようとしたのも、こうした著者の観点からすれば当然の結果であつたと言えよう。

第三部「現代精神の流れ」を構成する第十三の論文「現代アラブ文学研究」では、まず新・旧両思想が離反してゆく時代、すなわち十九世紀が問題にされる。ムハンマド・アリーの開化政策によるエジプトへの西欧思想の流入、また、キリスト教団体によるシリアの西欧化の激しさは伝統的なアラブ文学指導者の間に反省を促したが、それは同時に新旧両思想が両極化してゆく過程でもあつた。ジャーナリズムの發展は文学運動の社会的影響を一段と増大させた。二十世紀初頭の新世代の作家は古い思想体系と西欧の精神的自由との間の混乱に直面するが、マンファルティーによる散文體の發展、ムスリムと合理主義者とを合せ持つたムハンマド・アブドウの登場等によつて、近代アラブ文学は今や發展の歩を踏み出そうとしていた。エジプトにおける新文学派はそうした發展の文学活動の担い手であつた。その成果がハイカルの「ザイナブ」であり、マジニーの「イブラーヒーム・アル・カータイプ」である。

次いで著者は、西欧からもたらされた組織や技術に隠れ

て、イスラム社会内に位置を占めようとする文化価値に対する内的反発を問題にしている。それが第十四の論文「西歐文化に対する中東の反発」である。ここでは、導入された西歐文明を真に理解出来たのは少数の支配階級に限られていたこと、従つて全社会的に見る時、中東における西歐文明の影響は精神的要素より物質的要素がはるかに強いこと、さらに西歐化された階層が権力を確立した方法はナシヨナリズムであつたが、それは大衆をつかむに従つて東洋化したこと、しかしながら、西歐的なものに対する反発はあるにせよ、明らかに事實は「近代化」＝「西歐化」である等のが述べられる。それ故著者によれば、今後に残されたイスラム社会の懸案は、いかにしてムスリムが西歐の文化価値概念を形成するかということになるのである。なお、現代史については同じ著者の *Modern Trends in Islam* (Chicago, 1947) の「文学については同じく」 *Arabic Literature* (London, 1926) を参照されたい。物質的西歐文明がイスラム社会の經濟機構に及ぼした影響については、直接ここでは触れられていないが、最後の論文「現代中東史上の諸問題」において著者が述べているように、それは将来のイスラム研究の課題である。

以上、幾つかの論文を選んでこの内容豊かな論文集を紹介してきたのであるが、最後に、文體の変化を社会的に位置づけたアラビア語による論文「アラブ文学の考察」が収録され

つづらごとを附記してきた。

(Hamilton A. R. Gibb; *Studies on the Civilization of Islam*, Edited by S. J. Shaw and W. R. Polk, Routledge & Kegan Paul Ltd. London. 1962. 369 ps.)

ローベルト・ゲーベル著

スルフ・コタル出土カニシユカ碑文の 三原文

辻直四郎

スルフ・コタル出土のいわゆるカニシユカ碑文が、大同小異の三原文によつて代表されるのは、今や周知の事実である。すなわち最初(一九五七年五月)に発見されたM(Onolith, A. Maricq JA 1958, p. 352, E. Benveniste JA 1961, p. 115—6)と、一九五八年十一月—一九五九年十一月の間に発見された石片五十三個を接合して復元されたA(二十一片)とB(三十二片)とを指す(Benveniste op. cit. p. 117—131)。資料の増加は、この重要な碑文の研究に多くの示唆を与えると同時に、複雑な問題を提起した。バンヴニストは主として碑文の最後の部分の広略を基準とし、人名を挙げるこ

と最も多く、従つて最も簡略なものを先頭に置き、A・B・Mの順序を推定し、順次に置き代へられたものと見なした(op. cit. p. 132—140)。すなわちAは碑文に述べられる出来事(Nokonzokoの事蹟、op. cit. p. 116)の直後のもので、一個の署名を含む。Bは神殿の第一修復後のもので、Aの内容を再録しつつ、関係した高官の名を追加している。第二修復に際してAとBとは、井戸の壁の構築に利用されたが、新たにMが作られ、再び当初の出来事を記録し、かつ神殿ならびに井戸の修理に関係したすべての人の名を列挙して、これを後世に伝えるため、全文を注意深く一枚の石に彫り、正面外側の生煉瓦の壁に填めこんだ(ibid. p. 140)。

これに対しD. Schlumbergerは、AとBとの発見された情況から判じて、両者が同時に廃棄されかつ同時に井戸壁に利用されたと見る方が自然であると指摘し、バンヴニストの説に修正を加えた。彼はAとBとの並存時期を仮定し、なお未解決の問題の残ることを認めつつも、碑文から見た神殿の歴史を次の三期に分ける。すなわち、一、神殿の建立者カニシユカ王の時期。二、Nokonzokoによる第一修復(碑文の挙げる)井戸と基底台地(La terrasse de base)との建設を含み、AとBとはこれを記念する。三、第二修復、AとBとが在った壁の破壊、その結果生じた材料による井戸壁の修復、Mを制作し基底台地の正面に設置。最後に基底中央階